

老子を英語で読んでみようー1

大阪大学名誉教授 長谷川 晃

私は30年近く前から毎月、満月の日に、京都のロシア料理店の加藤オーナーのご招待で「月読み会」という会を持っている。当初は加藤御夫人の智恵子さんのお好みで拙著「日本女性が世界を変える」の内容の紹介を中心に母性文化社会日本の話をするところから始めた会だが、続いて物理の四方山話に移り、その後、母性社会を代表する哲学者の「老子」を読むことにした。老子は私の人生の師匠、大徳寺小堀南嶺和尚から教わったもので、ある程度は自信を持って話をする事ができた。その時、たまたま南嶺和尚からいただいた老子の英訳本、Gia-Fu Feng and Jane English, Vintage Books, New York, NY. (1972) が手元にあったので、難解な老子を英訳を使って解釈しようというわけで、毎回、老子各章の原文、和訳、それに英訳の3点セットを用意し、10年以上かけて老子全81章を読み終えた。今回、二回に分けてテクノネットで紹介するのはこの老子の話の抜粋である。

日本が母性文化の国であるという、よく外国人から、日本では夫が先に歩き、妻が後からついてくるのではないかと、反論される。実際男女共同参画社会のデータを見ると日本は世界で121番目と極めて低い位置にある。この結果、表面的には母性文化の社会とは言いにくいかもしれない。しかし、実情はそうではない。例えば、多くの家庭の財布の紐は主婦が握っている。表と裏とでは実情が全く異なることを外国人たちは知らない。これに対し、男女共同参画データでは日本より遥かに上位にあるアメリカでは家庭内のファイナンスは夫が牛耳っている。さらに重要なことは、日本の家庭内の主婦の影響力は子供の面倒や教育にも大きく関わり、結果として子供は母親の影響を強く受けて育つ。第二次大戦中、日本兵は「天皇陛下万歳」と言って戦死したと言われているが、実は、「お母さん」と言ってなくなった兵が大半と聞く。日本全体が群雄割拠した戦国時代でさえ、武将たちの手綱を後ろで引いていたのは奥方たちだ。この結果、日本人男性の頭の中は知らないうちに女性的にプログラムされていて、男性が支配する日本社会全体は極めて母性的になっている。こういうわけで日本社会のファンダメンタルは縄文時代から引き継いだ母性文化社会であり、老子の考えがぴったりくる。

さらに、なぜテクノネットで老子の話をするかという、老子のものの考え方が、理系の考え方の根幹に関わっているからだ。老子は物事の絶対性を否定し、「無, empty space」の重要性を謳い、そして宇宙誕生の話さえ

する。私はすでにこのシリーズでは学生たちの教訓のために何度か「老子」を引用してきた。老子は紀元前5世紀頃の中国南部の出身の哲学者で、後に禅宗の「無」の思想に大きな影響を与えたと考えられている。日本文化には、縄文文化にその源を置く「自然」を「自ずから然り」として愛する考え方と、後に武士道などの規範となる、「礼」、あるいは「かたち」に重きを置く考え方の二つの面がある。老子はその前者、つまり日本人の持つ自然との一体感をうまく記述しているという意味でも特に興味深い。加えて、老子の好む母性文化は日本人の持つ本音の部分にぴったりくるものがある。一方、老子と対比して論じられる漢民族の孔子は日本文化の「かたち」の規範となっている。

孔子の論語は弟子たちが孔子の言葉を編纂したものからできているのに対し、ここで紹介する老子の「道徳教」は、老子本人が自ずからの言葉で記述したものである。全体で81章からなり、大変興味深い記述が多く、読んでいて共感する箇所も多々ある。この書を精読すると、われわれ日本人が縄文文化から受け継いだ思想、あるいは「こころ」を大変うまく記述している様に思われ、漢民族より、日本民族を代表する思想家とすら感ぜられる。老子の思想は現代中国では道教として引き継がれ、中国南部の人々に愛されているが、その内容はどちらかと言うと呪いのものに变化していつている。これに対し、日本ではその思想は禅宗で受け継がれ、自然の中での生活を是とするする人たちにも愛され、中国式道教としてではなく、老子そのものを享受している。古代日本を表す、倭国は中国の老子の出身地方をも表す言葉で、日本人との共通点があっても不思議ではない。実際、老子80章で記述されている老子の理想郷は縄文日本を表しているとする学者もあり、日本文化との関連も深いと考えられる。文字を持たなかった縄文人は、その思想を遺跡と発掘された土器や土偶で残しているが、老子はそれを文章で残してくれていると見ることもできる。著者は最近 Kindle Bookから「老子と日本人の心」なる著作を出版したが、これはこうした考えに基づくものである。

老子の「道徳教」は上編の「道」と下編の「徳」からなっていて、文章そのものも難解である上、文書を解釈しても、その意味するところを理解することは困難な場合が多い。しかし、これを英訳で読むと、非常にわかりやすくなる。テクノネットではページ数も限られていて、道徳教81章を全て紹介することは不可能で、興味ある方

は私の著書「老子と日本人の心」をご覧いただくことにして、ここでは、道徳教の上編の第1章と第2章、それに下編の第80章と81章と、道徳教の始まりと終わりを中心に紹介し、これらの章の英訳を使ってその意味するところを解説しようと思っている。

老子の英訳は50点ほど存在すると言われていて、どれを使うかは惑わしいところだ。最もよく知られているのは源氏物語の翻訳などで日本でも有名な英国人の学者、Arthur Wales氏のものである。彼の訳は、いつもそうだが、大変学術的で、権威ある学者としての立派なものだ。しかしこの訳は少し古いこともあり、今の時代にはそぐわない点もある。例えば、原文で主語が省いてある箇所英訳でheという男性代名詞を頻繁に使用していて、本来母性文明を代表する老子の訳としては相応しくないと思われる。私が老子の英訳として選んだのはGia-Fu Feng (馮家福; 1919-1985)のものだ。Feng氏は中国生まれで北京大学卒業後、米国ペンシルベニア大学で修士号を取得した、中米両方のバックグラウンドを持つ学者で米国での大学で教鞭を取ったこともある。ここで引用する老子の英訳はGia-Fu Feng and Jane English, Vintage Books, New York, NY. (1972)のもので共著者のJane Englishは本での挿絵を担当している。この著書はアマゾンでも入手できる。それでは本論に入ろう。

老子上編 第1章

道可道、非常道、名可名、非常名、無名、天地之始、有名、万物之母、故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其微、此兩者、同出而異名、同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門。

Gia-Fu Fengによる英訳

Tao that can be told is not the eternal Tao.
The name that can be named is not the eternal name.
The nameless is the beginning of heaven and earth.
The named is the mother of ten thousand things.
Ever desireless, one can see the mystery.
Ever desiring, one can see the manifestations.
These two spring from the same source but differ in name; this appears as darkness. Darkness within darkness. The gate to all mystery.

さて、この章の意味を考えよう。第1章の初めに出てくる「道可道」の最初の「道」は老子が「自然」、あるいは神の与えたもの、あるいは神そのもの、として道徳経で最重要視している言葉である。英訳はwayだろうがこの訳者はあえて訳さず道の中国読み、Taoを使っている。老子の思想は英語でTaoismと訳され、wayismと言わない。しかしWiley氏はWayと訳している。「道可道」の二番目の「道」は日本語では「言う」という意味を持つ。道の文字は現代の中国でもそのように使われている。英訳の意味は「人に言葉として告げることのできる「道」は本来の道、あるいは、不変の神の道、ではない」となる。

常道を「常の道」と日本語で書くと、“例”の、とか“いつも”の道の意味を持つので、よくない。常は「変わることのない」と言う意味なのだ。結果、「道可道、非常道 - Tao that can be told is not the eternal Tao -」は私、老子、が言いたい「道」を道という言葉で言ってしまうと、その瞬間に、本来の、私が大事にしている、神が与えた「道」ではなくなる。という意味になる。日本人の心のベースとなっている縄文人は文字を持たずに1万年以上も文化的生活をしてきた。文字がなくても人間は、本来の生き方をし、言葉で互いにコミュニケーションをとることができる。逆に、道を道と言う文字で表してしまうと、本来の或いは永遠(eternal)の道でなくなるのだ。元来、物事の本質は文字では表現できない。「道」を道という文字で惑わされないようにしてほしい、と老子はいう。

実際、科学や哲学の分野でよく原語を無理して和訳して却ってわからなくしている場合が多い。例えば、哲学の原語、philosophyはギリシャ語のΦιλοσοφίαから来ているが、これはΦιλο(フィロ)つまり、love、そしてσοφία(ソフィア)、すなわち、wisdomの造語で叡智を愛すると言う意味だが、これを哲学と訳すと何の意味かわからなくなる。もっとひどい例が、形而上学と形而下学だ。形而上学の英語表現はmetaphysicalだが誰が和訳をしたのかは知らないが、physicalを形と訳しているのはいいとして、形而下学の原語はphysicalだと言うことを知ってなーんだと思う。思うに、日本語でmetaphysicalを形而上学とってしまった後で、physicalを無理して形而下学と訳したに違いない。我々普通physicalを物理的と訳して、その意味を理解しているが、これを形而下学的と言う人は哲学者以外にはいない。また、electromagnetic fieldを電気屋さんによく電磁界というが、これは電磁場という方が正しい。英語のfield、あるいはフランス語のchampには界(circle)という意味はない。老子は「道」を使って自分の思想を表現しようと試みるが、まず、その意味を言葉で表現するときの曖昧さに気づき、言葉の持つ意味について論じることから始めている。極めて理科学的発想である。

続く「名可名、非常名」の英訳は、- The name that can be named is not the eternal name -、すなわち、「名付けることができる名は本来の「名」ではない」という意味になる。いい例が名前である。私の名前の「晃」は私を知っている人が持つ晃と別の晃名を持つ他人では全く違う意味を持つ。ここで言う「名」は固有名詞だけではなく、「木」「花」「草」「日」「月」などの普通名詞についても当てはまる。「はな」を「花」と言ってしまうと本来の「はな」ではなくなる。こう考えると「名可名、非常名」は老子が言いたい「道」を道という言葉で表してしまうと本来老子が思う道ではなくなってしまうという「道可道、非常道」の説明文と解釈することができる。縄文時代に誕生したと考えられる日本語には他の言語に比べ、その文化の持つ特徴から、名詞と動詞のボキャブ

ラーが比較的少ない。日本語の構文は主語なしで、目的語から始まり、そして動詞が来る。また、目的語には形容詞や副詞が使われることが多い。その結果、日本語の名詞や動詞には外来語が今尚氾濫している。他方、日本語は極めて豊富な形容詞を持つ。名詞では表すことができない分、形容詞で表そうというわけで、日本語は「名可名、非常名」を知った言葉と言えるかもしれない。私は老子はいろんな場面で日本固有の文化、日本人の「心」を表していると思っている。日本人が自ずからの「心」を表すのに不器用であることをうまく補っている。実際老子第八十章（後述）に表されている老子の理想郷は縄文日本を表していると考えられるので、こうした私の考えは具体性を持つ。

次に進もう、「無名、天地之始-The nameless is the beginning of heaven and earth-」の英訳は無名を文字通りnamelessと書き、天地をheaven and earthとこれも、文字通りに訳しているが、天地は宇宙という意味だろう。つまり宇宙が誕生した時には当然「名」はなかった。次の、「有名、万物之母-The named is the mother of ten thousand things-」の有名は「ゆめい」ではなく、名有り、つまり名前が付けられた段階での「名」は万物の母を表すと言っている。老子全般を通じ、「母」なる言葉は幾度も登場するが、「父」は出てこない。これが老子が孔子の論語と対照性を持つ具体的な表れと言える。老子が母性文明の哲学者であることを物語っている。これこそ、日本人の心の源なのだ。縄文社会が母性社会であったことは、出現した土偶が全て女神像、あるいは母性像であることから明らかにされている。万物は母から誕生したのであり、父から生まれたのではない。旧約聖書で言う「神は自ずからの姿に似せて男性を作り給へり」- God created man on his image-の文章とは対照的である。ユダヤ・キリスト教文明では、男性神が人間男性を作ったとされている。同様に東洋の父性文明の元祖である孔子の論語には父は出てくるが母は出てこない。しかし面白いことに論語には「女」は出てくる。論語での女は汝（なんじ）の意味である。つまり目下の人に対するyouという言葉に「女」を使っている。明らかに男尊女卑を表す代名詞である。

「故常無欲、以觀其妙、常有欲、以觀其微-Ever desireless, one can see the mystery. Ever desiring, one can see the manifestations.」の訳では、常に無欲をever desireless, 「妙」をmysteryと訳している。「妙」には「言葉で表し得ない、極めて微妙な不思議」という意味があり、仏教でよく使われる語である。欲をなくしてみると、物事の背後にある言葉で表すことのできない微妙なものを見ることができ、[「常有欲、以觀其微」、つまり、欲があると その微（きょう）、つまり結果、あるいは英訳にあるように、表に現れているもの、manifestation、だけを見ることができると言っている。なかなか、微妙で素晴らしい表現ではないか？ 日本人の心にぴったりとくる言葉ではないか？ この訳でFeng氏は主語に“one”を使って、

one can see と訳している。この箇所をWiley氏は“he”を使っている。続いて老子は「此兩者、同出而异名-These two spring from the same source but differ in name-」、つまり妙も微も本来同じ源を持つのが、別の名を持っている、と言う。そして、「同謂之玄、玄之又玄、衆妙乃門-this appears as darkness. Darkness within darkness. The gate to all mystery-」、その元の同じものを「玄」というと言っている。玄をdarknessと訳しているが、これは暗闇を表すので、文字通りの中国語の玄の意味だろうが、老子の玄には、もっと深い意味があり、老荘思想の根源をなす言葉で、万物の根源という意味を持つ。老子はここで老荘思想の玄を定義していると考えていだろう。聖書で言う「まず、光ありき」、ではなく、まず、暗闇ありきなのだ。老子はblack holeの存在を知っていて、我々のいる宇宙は別の宇宙のblack holeから誕生したのだといっているのかも知れない。玄は老子の各所で出てくるので、ここで其の意味をよく理解しておくに役に立つ。この章全体を安易な言葉で言い表すと「私が大事に思っている「道」を道という言葉で言ってしまうと、時を経ても不変である道ではなくなってしまう、同様に、物事を名付けると、その瞬間に本来の物事の本質を見失う。本来、宇宙の始まりには名はなかった。万物の母がその名付け親である。欲をもたずに物事を眺めると、その本質を見極めることができるが、欲を持って眺めると、本質を見失い、表面的なものしか見えてこない。この両者は元来同じものである。その同じものを玄、あるいはそのもの自身と言う。玄の奥にある玄である。この玄こそが全ての妙、或は、不思議の入り口なのだ。」と言ったところだろう。

それでは次に第2章に移ろう。

老子上篇 第2章

天下皆知美之為美、斯惡已、皆知善之為善、斯不善已、故有無相性、
難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨、
是以聖人處無為之事、行不言之教、万物作焉而不辭、生而不有、
為而不恃、功成而弗居、夫唯弗居、是以不去、

Gia-Fu Fengによる英訳

Under heaven all can see beauty as beauty only because there is ugliness.

All can know good as good only because there is evil. Therefore having and not having arise together. Difficult and easy complement each other.

Long and short contrast each other. High and low rest upon each other.

Voice and sound harmonize each other. Front and back follow one another.

Therefore the sage goes about doing nothing, teaching

no-talking.

The ten thousand things rise and fall without cease. Creating, yet not possessing. Working, yet not taking credit. Work is done, then forgotten. Therefore it lasts forever.

この章で老子は物事の絶対性を否定し、全て相対的に評価、あるいは見るべきであること、また同時に相反するように見えるものは実はその間で和を生じ、自然と調和を作っている、と言う。だから、聖人は何も言わず、無言の教えをする。そして自然はいろんな働きをしながら、功を求めず、仕事をしながら、そのことを忘れ去る、だから、その作品は永遠に残るのだと、説く。英語で「天下皆知美之為美、斯惡已」は皆が美しいものを美しいとすることができるのは、単にそこに醜さ、があるからだ - Under heaven all can see beauty as beauty only because there is ugliness -, と言う意味に訳している。「斯惡已」を「それ悪のみ」と和読みをするとこの意味にはならない。英訳の - only because there is ugliness - が正しい訳だ。同様に「皆知善之為善、斯不善已」 - All can know good as good only because there is evil. - 皆が善 (good) を善と知ることができるのは悪 = 不善, evil, があるからだと言う意味になる。つまり老子はこの世には絶対美も絶対善もなく、同様に絶対醜も絶対悪もない。と言っている。まさに絶対性を重視する男性文明、ユダヤ・キリスト教文明に対する挑戦である。同時に孔子の唱える絶対「善」に対する挑戦でもある。老子は美醜、善悪は相対的なもので絶対性を持つものではないという。物理学で絶対と思われていた質量が他の慣性系では別の値を持つことが分かったのは20世紀になってからである。その後物理学は絶対性を疑うようになった。

これに続いて老子は言う「故有無相性、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨 - Therefore having and not having arise together. Difficult and easy complement each other. Long and short contrast each other. High and low rest upon each other. Voice and sound harmonize each other. Front and back follow one another -」、つまり、有無、難易、長短、高低、それに音と声、前後などは背反するように見えるが、実はそれぞれがうまく調和を作っていてお互いがお互いを必要としているのだと、主張する。つまり、老子は絶対性を否定し、背反する事象も実はお互いに調和を取り合っているのだと言う。これも絶対性を重視する男性文明に対する挑戦である。物事を相対的に評価するだけでなく、背反する事象は実は調和を作っているのだと言っている。これこそ母性文明の真髄ではないか。物事を相対的に見るだけでなく、相反するように見える事象は実はそれぞれが和を作っているのだと言う。ずーっと後の鎌倉時代に親鸞が「善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや」と言ったのはこうした老子の考えが基礎になっていることは間違いない。キリスト教では考えられない。こうした考

えをいきなりぶつけられると西洋文明の人々は戸惑い、まず、相手がバカだと思う。日本人も良くそう思われる、実際、その理由、その考えの根底にあるものを論理的に説明できなければ、「お前はバカか」で終わってしまう。老子はそうは言わせないと後の章で懇切丁寧に論理的にその理由を説明するのだ。老子は続いて「是以聖人處無為之事、行不言之教 - Therefore the sage goes about doing nothing, teaching no-talking -」で聖人、つまり、ひじり sage は何もせず、何も教えることをしない、しなくていい、と言ひ、儒教で出てくる聖人の言を否定する。余計なことを言わなくていいのだと、teaching no talking、つまり、不言の教えをするという。禅での教えだ。そして、「万物作焉 而不辭、生而不有、為而不恃、功成而弗居、夫唯弗居、是以不去」の文は自然の営みを紹介する、少し難しいが、和文で読むと、万物はいつも産み育てて (万物作) 而 (じ) して辞めない、生じるが保持しない (不有)、働いても自分がやったとは言わない (不恃)、功をなしても居座らない (弗居)、それ唯居らず、是を以って去しめられず (不去)。だからいつまでも続くのだ、英訳は、Creating, yet not possessing. Working, yet not taking credit. Work is done, then forgotten. と。この考えは母親の子育て、自然の中での動物や植物の営みをうまく表現している。そこから人の教えをうまく導いている。父性文明社会ではこれとは逆に、「自分がやった、やった」と言わないと生きていけない、ために仕事の成果を誇張し、自己の存在をアピールする。これを英語でtake creditという。残念なことに最近の日本にもこの傾向が表れている。「出る釘は打たれる」の反動なのだろう。打たれるよりはいいかも知れない。しかし、日本文化の根底にあるすばらしいものを見逃さないようにしたいものだ。それはここにあるように、母性の如く、生み育てても自分のものとしなない、また、功をなしてもその上に居座らない、そして黙って去ることだ。紀元前5世紀のものとは思えない素晴らしいものではないか。

(通信 昭和32年卒 34年修士)